

希望

チューリツヒ日本人学校便り

平成 27 年 6 月 1 日 発行
第 10 号
発行人 校長 鈴木史良

果敢なチャレンジをしよう

—— 自分の目標を見直して、より効果的なものに ——

1 学期も半ばを過ぎて、今日から 6 月に入りました。新学年になった当初は多くの子どもたちが自分の目標を立てたのではないかと思います。6 月の全校朝会では、自分をさらに一步高める目標のチェック方法について話をしました。

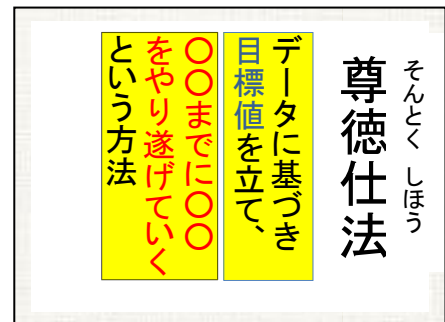
ここで登場したのが「二宮金次郎」という江戸時代の人物。昔は日本じゅうの小学校の校庭に薪を背負い、本を読みながら歩く少年像があったものです。戦前の道徳観の塊のように思われがちな金次郎ですが、新たな視点で見直してみると、現代社会にも通じる合理的な考え方をもっていました。

彼は江戸時代、神奈川県小田原の貧農に生まれ、10 代前半で両親を失いました。兄弟みなばらばらとなり、親類たちに引き取られての生活を体験しますが、自分の目標をたてて努力した金次郎は、24 歳の若さで失われた田畑を買い戻し、家を再興しました。その後、尊徳(そんとく)と改名して小田原藩に重用されたり、北関東の村々の再興に尽力したりした話は有名です。

注目したいのは、彼の考えた方法論。“尊徳仕法”と呼ばれ、“データに基づき目標値を立て、〇〇までに〇〇をやり遂げていく”という方法です。驚いたことに、これは現代、世界から認められた日本企業が入力した科学的な品質管理方法（クオリティー・コントロール）の考え方と同じなのです。

これを学校生活に当てはめて考えます。子どもたちのこれまでの目標というと、「〇〇になりたい」や「〇〇ができるようになる」という漠然とした願望を表現したものが多くみられました。海外で学ぶ子どもたちの多くは保護者の転勤に帯同しますから、在籍期間の短い学習環境にあっては、自分の目標を管理し、達成に向けて努力していくことが効果を上げる方法だと思います。いつまでたっても実現の見通しがつかないような目標では成長が期待できません。

目標のチェック方法のポイントは「〇〇ができるようになりたい」と決めた目標について、「いつまでに」という具体的な日時を決めることです。そうすると、次に「そのために、今やらなければならないことは〇〇だ」ということが具体的に見えてきます。具体的に見えてきたら、「その〇〇をやるために、いま行動する」ことが大切になってきます。このように自分の立てた目標に対して、果敢にチャレンジしていくことで、自分を高めていってほしいと思います。



運動会まであと6日間、準備着々と

先週、ウスター市民へのPRとして、子どもたちが自作した運動会ポスターを掲示していただくよう、学年別に各店にお願いに回りました。子どもたち一人ひとりが一つの店を担当し、店主にドイツ語で話し掛けました。ドイツ語の教師も同行していますので、日頃学習しているドイツ語会話の実践の場となりました。伝えるべきことは、「グーテンモルゲン」から始まって「アウフ ヴィーダーゼン」まで、12の文にまとめられています。それでも低学年の子どもたちにはプレッシャーとなったようで、カタカナでルビのふられた会話文の書かれたプリントをずっと見たまま、店主に挨拶した子どももありました。地元の方がたは、そんな子どもたちの様子を笑顔で受け入れてくださり、ポスターの絵を見て、かわいらしい絵だとほめてくださいました。日ごろお世話になっているウスターの方がたにご挨拶できたのはよかったです。

また、校内では紅白にわかれた応援練習や和太鼓の練習にも力が入ってきました。Aさん、Bさん、両応援団長のもと、紅組も白組も大きな声と手拍子で、高らかに伝統の三三七拍子を演じます。和太鼓の演奏練習も体育館内から屋外へと、より実践的な練習となりました。スイスの澄み切った青空のもと、子どもたちが演奏する和太鼓の音が響き、全身を使って演奏する子どもたちの姿が躍動します。短い練習時間ですが、子どもたちの頑張りによってすばらしい演奏になってきました。運動会本番までには、応援も和太鼓も更にレベルアップするでしょう。



運動会ポスター掲示のお願い



ばちさばきも軽やかにドン!

「読み聞かせ」に子どもたちが魅了

5月27日(水)、バーゼル在住のC氏が本校を訪れ、小学部の子どもたちに「読み聞かせ」をしてくださいました。今回は、ウクライナ民話の「びんぼうこびと」という話でしたが、酒井氏は絵本を手にしていませんでした。「これからお話をしますので、絵は自分の頭の中で想像してください。」とおっしゃり、少し間をおいて静かに語り始めました。「びんぼうこびと」たちと貧しい男との会話や、欲を出した金持ちの男が自分の家に「びんぼうこびと」たちが入ってしまった時の慌てた様子など声色を変化させ、ある時は高らかに、ある時は低いトーンで、この物語を綴っていきました。子どもたちもいつの間にか語りの世界に引き込まれ、情景をありありと想像できたに違いありません。

